

日本音楽財団・全国公立文化施設協会共同事業

ストラディヴァリウス・コンサート

このコンサートは、世界的に活躍する演奏家による名演と名器の音色を
身近なホールでお楽しみいただくとともに、
本コンサートのチケット代から得られた収益を地元に還元し、
各地域における音楽文化の振興と普及や、その他の公益事業に役立てることを目的としています。

Profile



© Victor Marin

ヴァイオリン 金川 真弓 Violin KANAGAWA Mayumi

ドイツ生まれ。4歳から日本でヴァイオリンを始め、その後ニューヨークを経て12歳でロサンゼルスに移る。現在はベルリンを拠点に演奏活動を展開している。ハンス・アイスラー音楽大学でコリヤ・ブラッハーに、また名倉淑子、川崎雅夫、ロバート・リブセットの各氏に師事。音楽への専心と、豊潤かつ深い音色で奏でられる音楽性で聴衆を魅了している。

2018年ロン＝ティボー国際音楽コンクール第2位入賞および最優秀協奏曲賞、2019年チャイコフスキー国際コンクール第4位を受賞し、一躍注目を集める。これまでに、プラハ放送交響楽団、マリンスキー劇場管弦楽団、ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団、フィンランド放送交響楽団、ベルギー国立管弦楽団、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京都交響楽団、札幌交響楽団等と共演している。2022年は、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団やベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団とのデビュー公演を行った。室内楽ではトランス＝シベリア芸術祭やヴェルビエ音楽祭等に出演しているほか、ドイツで若手演奏家によるアウトリーチを目的とするトナリ・ツアーズに参加した。日本では、シャネル・ピグマリオン・デイズでの公演も好評を得ている。

使用楽器は日本音楽財団から貸与されたストラディヴァリウス1725年製ヴァイオリン「ウィルヘルミ」。



© Janine Guldener

ピアノ 久末 航 Piano HISASUE Wataru

現在、その将来が囑望される新進気鋭の実力派ピアニスト。2017年、伝統と格式あるミュンヘン国際音楽コンクールで第3位および委嘱作品特別賞を受賞して一躍国際的注目を集める。リヨン国際ピアノコンクール第1位および聴衆賞、メンデルスゾーン全ドイツ音楽大学コンクール第1位および特別賞、青山音楽賞パロックザール賞など多数の受賞歴を誇る。

大津市出身。2018年度公益財団法人ロームミュージックファンデーション奨学生。

辰巳晴生・美行、村上久仁子、田隅靖子各氏の指導を受け、フライブルク音楽大学、パリ国立高等音楽院、ベルリン芸術大学にて研鑽を積み、それぞれ最優秀の成績をもって修了。G. ミショリ、E. シュトロッセ、P. ドヴァイヨン、K. ヘルヴィヒ各氏に師事。

これまで、AUDI音楽フェステバル、ヴェルツブルグ音楽祭はじめ、数々の音楽祭に出演。バイエルン放送交響楽団、シュツットガルト室内管弦楽団、東京都交響楽団、京都市交響楽団などと共演。コンツェルトハウス・ベルリン、紀尾井ホールで開催されたリサイタルはいずれも絶賛を博した。シャネル・ピグマリオン・デイズ2019アーティスト。21年には、CD「ザ・リサイタル」をリリースし、「レコード芸術」誌で特選盤に選ばれる。ベルリン在住。

日本音楽財団・全国公立文化施設協会共同事業

ストラディヴァリウス・コンサート



金川 真弓

MAYUMI KANAGAWA

ヴァイオリン リサイタル



© Janine Guldener

ピアノ：久末航

2024.9/23[月祝]

14:00開演(13:30開場)

一関文化センター中ホール

〒021-0884 岩手県一関市大手町 2-16 (「JR一ノ関駅」西口より徒歩約7分)

300年もの前に製作された
ヴァイオリンの至宝「ストラディヴァリウス」。
世界にわずかししか現存していないその名器を
用いて行なう本コンサートは
世界的ヴァイオリニストとピアニストを迎え、
クラシック王道の楽曲をお届けする。
時代を超えて人々を魅了し続けるその音色を
劇場で共に共有しましょう。

Program

J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト短調 BWV1001

J.S. Bach : Sonata for Violin Solo No.1 in G Minor, BWV1001
I. Adagio II. Fuga. Allegro III. Siciliana IV. Presto

バルトーク／セーケイ：ルーマニア民俗舞曲 Sz.56

Bartók/Székely : Romanian Folk Dances Sz.56

ブーランジェ：『ノクターン』『コルテージュ』

Boulanger : Nocturne, Cortège

ラヴェル：ツィガーヌ

Ravel : Tzigane

— 休憩 —

パガニーニ：「24のカプリース」Op.1から 第1番、第10番、第24番

Paganini : 24 Caprices Op.1 - No.1, No.10, No.24

サン＝サーンス：ヴァイオリン・ソナタ第1番 ニ短調 Op.75

Saint-Saens : Violin Sonata No.1 in D minor, Op.75
I. Allegro agitato II. Adagio III. Allegretto moderato IV. Allegro molto

※ 使用楽器 ストラディヴァリウス1725年製ヴァイオリン「ウィルヘルミ」

曲目解説

リサイタルの曲目はバランスの取れたご飯のようー
前菜、メインと副菜、そしてデザートをお忘れずに！

中学生の時にレッスンで言われたのをよく覚えています。

ヴァイオリン・リサイタルというのはオーケストラのコンサートに比べてここ数十年で随分中身が変わったもので、近年では一人の作曲家を焦点にその人のソナタを3曲並べる、などというコンサートが良くあるのに比べ、前世紀の巨匠ヤーシャ・ハイフェッツのプログラムを見ると、あるソナタから数楽章、バッハ1楽章、コンチェルトをピアノの伴奏で、そして6つほどの小曲、など今ならきっと“不真面目”と言われてしまいそうな、なかなか想像できない曲並びでした。

本日のプログラムは小曲も多く取り入れたサンドイッチです。まずは無伴奏で楽器の純粋な鳴りを聴けるバッハのソナタ。4つの楽章はアダージョ（ゆっくり、柱のように立つ和音の歩みの間に即興の線を入れたよう）、フーガ（主題と対立が色々な声部で重なる、バッハがどの作曲家よりもこの形式を発達させた）、シシリアーナ（タンタタンというリズムが特徴的な少し悲しめな踊り）、プレスト（早い、和音を色々な形に崩した表現）という構造で、すべてヴァイオリンの一番低い弦の調を中心に書かれています。

バルトーク、ブーランジェ、ラヴェル、パガニーニは、ハンガリー、フランス、イタリア、そして18世紀後半から第2次世界大戦までと幅の広い作曲家の集まりで、民族音楽から新しい奏法までを使い、ヴァイオリンの素晴らしいところを色々楽しめる曲です。バルトークは民族音楽学という分野を親友と共に創るほど東ヨーロッパの様々な村へ（最終的にはエジプトのほうまで）簡単な録音機を持って旅し、地元の人々の歌や踊りなどを集めて記録しました。このルーマニア民俗舞曲も旅で集めた踊りをアレンジしたものです。

リリ・ブーランジェの姉、ナディアはバーンスタインやガーシュウィンを教え、ラヴェルとの交流もあった、とても有名な作曲とハーモニーの先生でした。しかしリリは姉以上の才能を認められながらも体が弱く、たった25歳で亡くなりました。この素敵なノクターン（夜の歌）とコルテージュ（行列）は18歳と21歳で書いた作品です。

ラヴェルのツィガーヌはとても有名でたくさんのヴァイオリニストに愛されています。ツィガーヌとは“ロマ族”の意味で、当時のスターヴァイオリニスト、ハンガリー出身のイエリー・ダラーニのために書かれた、即興と妙技たくさんの曲です。ちなみに彼女はバルトークのピアノで、バルトークのヴァイオリン・ソナタを2曲とも初演しました。

パガニーニの24のカプリースは、今ではどのヴァイオリンの生徒にも欠かせない練習曲ですが、当時はパガニーニ以外誰もあれほど難しいものを弾ける人はなく、彼はツアー中でも盗み聞きされないように真夜中に練習して、楽譜に書いて出版するのも自分の演奏活動が終わるまで待ちました！

最後にサンドイッチを閉じるパン、サン・サーンスの1番のソナタ。サン・サーンスは神童として注目された後オルガニストとして活動していたとともに、シンフォニー、コンチェルト、歌、オペラ、と色々なジャンルで多作な作曲家でした。50歳で書いたヴァイオリン・ソナタは少し珍しく2部に分かれた楽章が2つーそわそわと落ち着かない冒頭のアレグロ・アジタートから始まりとても美しく甘いメロディーのアダージョ、生き生きと軽いアレグレット・モデラートから最後まで走り抜けるアレグロ・モルトで、とても華やかに終わります。

満足できるご飯になることを願います、是非お楽しみください。

ヴァイオリニスト 金川真弓